

第4節 埼玉県立秩父高等学校に入学

1. 高校時代

秩父高校に入学した。1年の担任は数学の松木先生だった。私は松木先生が好きだった。数学の授業をととても分かりやすく教えて下さる先生で、生徒が何も考えずに「わかりません」と答えると、涙をかべて「何で分からないんだよ」と叱った。分からないことを叱るでなく、何も考えないことを叱るのである。松木先生はHRの時間を使って、倉田百三や夏目漱石や武者小路実篤の文学書を紹介して読書の啓発をしてくださった。私が読書する習慣を身につけたのはこときからである。2年生の担任は同じく数学の和田先生、3年生の担任は、日本史担当の宮前先生だった。私の大学受験科目の社会は日本史で受験した。高校に入学してもテニス部に入った。日焼して顔が焦げ茶色になった。同じ秩父高校の教員だった父は、私が音楽部に入るように音楽の川口清子先生から頼まれた。「お前は音楽部に入れ」鶴の一声だ。私は音楽部員になった。高校3年になって部長になった。高校一年から音楽室のピアノを使って、一人でバイエルを終わりまで弾けるようにした。そこで、初めて父が動いた。77鍵のオルガンを買ってくれた。川口先生のピアノレッスンを受けられるよしてくれた。高校3年の三学期になって、埼玉大学の池田浩先生にレッスンしてもらえるように取りはからってくれた。「お前が一番金がかかる」と父はぼやいた。



高等学校入学式

川口先生は生徒達から嫌われていたが、私には親身になって、いろいろな体験をさせてくれた。音楽部のピアノ伴奏を私に任された。高校3年生の文化祭で、先生ご自身の伴奏で私が独唱した。変声期上がりで高音域が出せなくなっていたが、トスティの「セレナータ」と「海に来よ」の2曲を歌った。体育館兼講堂の落成記念演奏会を企画して、当時名声が高かった平岡洋一マリンバコンサートをを行い、一般市民に秩父高校体育館兼講堂を披露した。床にシートを敷いて鑑賞できるようにして、500名くらい一般市民が集った。私も川口先生の言いつけで、入場券を近所に売り歩いた。よく売れた。コンサート当日に川口先生が私を呼んで、平岡洋一先生のそばに居させたりした。私が部長の時に、埼玉県高等学校合同演奏会に出演した。川口先生が生徒を引率して浦和方面に出張されたのは、後にも先にもこれ一度だけだったと思う。川口先生に連れられて、私一人だけ藤原歌劇団公演のオペラ「カルメン」を見に行った。東京の産経ホールである。鳥肌が立った。高校2年生の時に川口先生は、私に武蔵野音楽大学声楽科を受験するうに勧められた。父に話したが、2歳下の弟が大学に入るときには、家に大学生が二人になる。私立大に行かせるようなお金はないと言われてしまった。受験した大学は埼玉大学だけ、合格した大学も当然埼玉大学だけである。それでも、埼玉大学に合格できた。当時の秩父高校から埼玉大学への現役合格者は30名ほどだった。

2. 高校時代の手記一抜粋一

昭和32(1957)年3月23日(土) 晴

お墓参りに行くので終業式で大掃除だけして、11時50分のバスで父の方の墓と母の方の墓をお参りして、くたくたになって帰ってきたのが6時だった。今日でちょうど秩父高校に試験を受けて入ってきて1年、いろいろなことがあった。大滝村の土屋さんの家に行ったのが一番初めだった。幸姉さんに入学祝いに万年筆をもらいに行ったこと、親友の新井君ができたこと。

来年は何が何でも勉強をしなければ。しっかり計画を立てて勉強だ。父の言うとおりに遊ぶことは第二にする。新井君も遊び友達であってはならない。勉強の友達であって、自分の本当に進む道を正しく選んでくれる友達でなければ。父にこんなことを言われた「お前は脱線するような気がして仕方がない。女関係をもって……。」もし、こんなことがあったらどうする？

私は何故音楽が好きなのか、自分にも分からない。しかし、音楽は私にとって命であり、この上ない私の人生の力である。だから音楽あってこそ、私は今まですべての人と素直に、愛情をもって交際してこられたのである。私から音楽を取って何ができよう。それは私にとって絶望であり、人生の地獄である。特技のない私には、生き抜く力がなく、とっくに横道にそれていたろう。そのときの私には素直な気持ちなど少しもなく、何事の美しさも感じないで、ただ何らかの惰性で生きるようなものだろう。今までの私は音楽一本で生きてきた。これからも音楽一本で生きるつもりである。

昭和33(1958)年1月1日(木) 雨のち雪

今年は正月の1日から雪が降った。映画の帰り道に公園の桜の木に咲く雪の花をセンチな気持ちで眺ていたら、その美しさにうたれ、何か今年はよいことがあるのではないかと思えた。「正月の1日から雪が降ったのだから、今年是一年中さむいだらうなあ」などど兄が冗談をいったが、1日に雪が降ったというのは、何か良いことがありそうな気がする。今日は愉快地過ごすことができた。僕が今年に希望することは、幸福に、気楽に、憂きことなく過ごすことができ、埼玉大学にパスすることだけだ。一般教養の力をつけることだ。生物、日本史、数学、国語、英語みんな半分位の勉強しかして

ない。希望は以上のことだ。誓うことは、実行することは「勉強に実力をつけることだ」一誓う。

父が8時頃明日の音楽部新年会のこと文句のようなことをぶつぶつ言った。父が発起人なのに、よく気の変わる人だと思ふ。明日の新年会がどんなふうな新年会になるかわからないが、とにかく僕にとって、また部員にとっても「楽しかった」と思い出せる新年会にしたい。明日みんな来るかしら。細岡は来る。高倉は来る。辺見が来る。吉田が来る。富田さんが来る。あと、半信半疑が藤沢さん、杉木さん、山中さん、井上さん、石田君、その他2～3人だ。神様、僕の欲する10人になるようお願いします。

今日は勉強の方とピアノを半々にしようと思っていたのに、いや勉強の方が主だ、それなのに時間の殆どをピアノに使ってしまった。大学入試のソナチネの12番、トロイメライを弾いたがややこしい。それからまた12番を弾き、ベートーベンのメヌエットを弾いたら案外簡単だった。月光の曲は難しいと言うより長すぎる。どうもピアノを弾く方が勉強するより面白くて、すぐそっちに気が移ってしまう。やりきれないよ、まったく。

昭和34(1959)年1月3日(土) 晴れ

今日の新年会はとても楽しく過ごすことができた。おそらくみんなもそう思ったろう。出席した連中は、細岡、高倉、吉田、斎藤、高橋、浅賀、深田、藤沢、井上の諸君であった。当然来ると思っていた3年生の人達が来ずに、半信半疑に思っていた人達が来たのは意外思った。ままたらぬのが浮き世の常というが、その通りだと思った。しかし、楽しく過ごせたことはとても嬉しい。トランプをし、百人一首をして、レコードを聴き、とても楽しかった。家の周りの道がとてもぬかった。

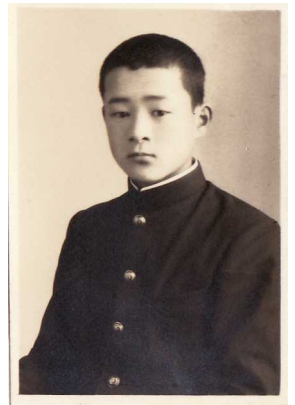
1959年1月4日(日) 晴れ

今日梅根さんがきた。僕は写真よりいいと思う。なかなか美人だ。兄の嫁さんにはもったいない話だ。しかし兄ちゃんはいいい人を見つけたモンだなあ！兄ちゃんもすみにおけないモンだ。これからは真ん中とはいかなくとも、せいぜい真ん中より1cm位離れたところにおこうかな。この日記帳は12月まで。その中には埼玉大学に入れば在学中の記、入れなければ浪人中の記が書かれるわけだ。浪人中の記じゃいやだなあ。1年浪人、しかも「埼玉大学」を。僕がこのまま、全く勉強しないでいるとそうかもしれない。なぜって、僕には今どれだけの力がある？いまの僕には一般教養の力なんか全然ないはないか。これからその力をつけるのか。とんでも8分だ。いや、そうではない。まったくつかないことんかあるものか。これから3月までに100点を越えて、それ以上、200点を越えるくらいの力をつけるのだ。

1959年1月9日(金) 晴れ

とうとう中里君への贈り物が実現した。僕はもうダメダと思っていたのに。でも、果たしてみんな賛成ろうか。疑問である。「夢のような生活だ」と母は言った。吉田は「俺はこっちに行くのが好きだ」と帰ってしまう。しかし僕の心は、中里君の悩みを思えばこそ、悲しい、辛いときに我々の援助を思い出してもらために、少しでも力になってやりたいから贈るのだ。悪いことだろうか。若いときは、大いに苦しまなければいけない。そうだ、人ごとでなく、自分だってそうではないか。大学入試の受験勉強を控えた僕だ。入試を目前にした僕ではないか。うかうかしてはいられないのだ。落ち着いて、じっと前を見て、半分は取る覚悟、500点満点の250点を、1科目50点を。

僕という人間は外見から言うと背は高からず低からずスラッとしている。歩き方はよくわからないが、下手いとは言えない。顔は悪くはなく、よくもない。外見は普通より一寸良いといったところ。性質は表面らみると、同性とのつきあいでは、どんなことでもへっちゃらでしゃべりまくり、度が過ぎて人との対立をまねく。異性とは、言葉が悪く、心臓に任せてなれなれしくしゃべるため、友達ができるが評判はよくないろう。僕と気があって、真意を見抜いてくれた人には非常に好かれるが、少しでも気が合わない人には嫌われるだろう。内面は僕には非常によくわかる。素直さはないとはいえないが、良いほうではない。めんどつくさがあるところがある。だから母にはそんなに良くは思われていない。まあ、良いことと悪いことをわきまえていると言うことは、一人前ということ自分の誇りである。嫉妬心が以前と比べて非常に強くなった。表面には教養が邪魔をして、そんなに出ないが、心の中ではひどいものだ。頭は良くない。ピアノが弾けて歌がうまい。皆が褒めるほど、僕が普段思っているほど、僕は良い人間ではないことがわかった。僕という人間は、反省することによって、より一層高められる。



高校一年4月



高校3年担任和田先生のお宅にて

僕は一人になると、どうしてあの人のことばかり思い出すのだろう。恋というのは、こんなものなのだろうか。自由に話もできない人なんか恋してしまって、僕という人間はなんて馬鹿なんだろう。他にも女は何人もいる。しかし僕はあの人以外に、まだ理想に近い人を見たことがない。あの人の欠点も、また力なのだから。どうにも動きがとれないのだ。確かにこれが初恋である。心の中にしまっておくのだ。人生の果てまで。大学入試にどれだけ影響を与えたか。おそらく実を結ぶことのないこの初恋を。

僕はどうも楽をしたがっていけない。苦難の後でなければ、楽はできない。受験勉強をしなければ、大学に入ることはできないのだ。楽あれば苦ある。ぼくはこれを苦あれば楽あるとかえて、希望を持ちなさい。なにか後で起こるのではないかという恐怖感で楽はできないのだから。

こうしているといろいろなメロディーが即興的に浮かんでくる。すぐにオルガンに向かって、そのメロディーを書き留めておきたい。しかし僕には受験勉強がある。だからそんな暇はないのだ。残念だ。交響曲をつくりたい。シューベルトの未完成の楽譜を買って読みたい。ベルリオーズの幻想交響曲、運命の第一楽章。しかし僕には受験勉強がある。もし試験に合格したら、その合格の喜びの時に浮かんだ、明る澄んだメロディーを第4楽章にロンドでまとめ、今浮かんでいるメロディーを第一、第二、第三楽章にまとめれば、素晴らしい交響曲ができるにちがいない。才能さえあれば、芸大だって埼玉大学だって同じで勉強さえすればいくらだって名曲は作れるのだ。しかし作曲したい。上の欄外にかいたのは、今浮かんだもの。これを第一楽章第2主題にしたらどうか。

1959年2月26日（木）晴れ

今日は失恋記念日。図書館に行ったら、あの人が僕のすぐ後ろにいた。「びくっ」としたが、気がつかないふりをして勉強していた。午後4時頃、帰ろうと思って、ひょいと後ろを見ると、緑色のジャンパーを着た、僕より一つ大きい男が、その人と親しげに話をしていた。彼女は、甘たれているような、かっこうをしていた。「あんな人なんか好きになるものか。あんな緑色のジャンパーなんか着ている奴と親しく交際していたとは。ああ、僕はなんて馬鹿だったんだろう」。もっともって純粋な人だと思っていたのに。心のきれいなことが第一だから、もうあんな、汚れた人なんかと交際するまい。絶対に。ああ、考えても嫌だ。なんだい、ちびで大した器量でもなくせに。もう、僕は当分の間こういったことはないだろう。落胆して肩がせせこましくなる気がしたのも初めて。こんなに胸がくらくらしたのも初めて。あの状態を見たとき初めて嫉妬というものを味わった。二度と口をきくまい。絶対に。女というものには、潔白な心の持ちはないのか。人は我慢して一緒になるのか。そうすると、当分幸福な日はおくれなれないことになる。理想の女性はいない。いや、希望を持とう。たとえ、あの人がああいった人でも、あの人以外に女性は何人もいる。

1959年3月13日（金）晴れ

埼玉大学に合格すればいい。音楽科に入れればいい。埼玉大合格！音楽！願う！！埼玉大合格、音楽科。おお、神よ！！我に、埼玉大学合格の栄光を与えたまえ。埼玉大学中等教育音楽科合格の栄冠を与えたまえ。力なきこの我を助けたまえ。おお神よ！学力がなく、意志も弱きこの我を救いたまえ。

合格したのだ。合格。しかしこの合格は、想像していたような幸福な合格ではなかった。そこには前途多難が待ち受けていた。お金、お金。今まで使っただけでも10,000円以上。その他布団、こおり、…考えるだけでも頭が痛い。僕の家を全部持っていくようだ。破滅するような気がする。お金を出す父がにくらしくなり、母がにくらしくなり、姉がにくらしくなり、弟がにくらしくなり。父には、頭が上がらない。一体父は、これから必要なお金を出せるのだろうか。ああ、こんなにも費用がかかるのだ。どうしようどうしよう！身体全体の力がなくなっていく。僕にとってこんなショックは初めてだ。すまん。在学、卒業就職！アルバイトと。一人前。果たして、御礼が出来うるのか。

（この日記帳に昭和34年4月16日付入学許可書が夾まれていた。上記の者頭書のとおり昭和34年度入学を許可する。埼玉大学。）



高三の音楽部：後左から細岡、高倉、斉藤、石田。
前左から吉田、川口先生、私